

将棋で学んだ看護

老年看護学実習で訪れたデイケアにて、私は利用者の A 氏と将棋をすることになった。初めて利用者と接するため緊張したが、A 氏の昔の生活や趣味のことなどを話して、将棋が楽しくなるよう努めた。A 氏は穏やかに、気さくに話してくれて、とても楽しそうだったため、私も緊張がとけて心から楽しんで将棋をした。正午になり、A 氏の妻が施設に来られた。A 氏は妻から帰宅するよう促されたが、「決着をつけたい」と動かない。職員さんの「明日も来て、続きをしてはいかがですか？」という提案で納得し、帰宅された。

A 氏は認知症を患っていて、妻の介護負担を軽減するために通所していた。しかしデイケアに来るのは嫌で妻と一緒にいたいと思い、週 1 回・半日のみの利用だった。また、職員さんのトイレ介助を嫌がり、帰宅までに失禁することもあった。介護負担を減らすには、通所の回数や滞在時間を増やし、介助を受け入れてもらう必要があった。思い返すと、A 氏は妻が施設に来られた時に「今日はこれから、2人で食事に行くんです」と満面の笑みで言っていたため、妻と一緒にいたい気持ちが強いことはよく分かった。そんな気持ちが、結果として妻の介助負担につながるものが残念でならなかった。A 氏が将棋の続きをしに明日も来たいと思ったことは一歩前進だが、もっと何か役に立ちたいと思った。

デイケアでの実習は 2 日間。あと 1 日でできることが思いつかず諦めかけた時、職員さんから「もし明日 A 氏が来たら、将棋の途中でトイレに行くよう促してみしてほしい」と言われた。将棋を楽しんでいる間ならトイレ介助を受け入れ、それが今後のケアにつながるかもしれないとのことだった。実習期間を理由に諦めかけた自分が恥ずかしかった。たとえ短い間でも A 氏に楽しんでもらい、トイレ介助までつなげようと決心した。

次の日、A 氏は将棋の続きをしに来られた。職員さんや他の実習生も集まり賑やかになって、A 氏はこの日も将棋をとて楽しんでいた。始まって 1 時間ほどでトイレに行くことを促すと、トイレに立ち、職員さんの介助を受け入れた。私は心から嬉しくて、集まった皆とともに喜んだ。

将棋の決着はつかず、正午に終わりを迎えた。この日も A 氏は「今日はこれから、2人で食事に行くんです」と、やはり満面の笑みで言った。A 氏が妻と一緒にいたい気持ちは、長年ともに過ごした歴史が作り上げたとても強固なものだと思う。だから 2 日間の将棋で問題の全てが解決するわけではない。それでも、私が真摯に向き合ったことで、A 氏は嫌がっていたデイケアに自ら 2 日続けて来て、トイレ介助まで受け入れられた。この経験から、自分に何ができるのか考えることを決して諦めず、自分のベストを尽くすべきだと学んだ。A 氏や職員さんに将棋を通じて教わったこの教訓を忘れず、看護に励みたい。